

1833年庄内沖地震における越後の津波到達点と水死者数

矢田 俊文

1. はじめに

1833年（天保4）10月26日に起こった庄内沖地震による津波は、信濃川を遡上して近世新潟町（新潟市中央区）まで到達した。また新川（新潟市西区）を遡上して、津波は内陸2・5キロメートルまで到達した¹⁾が、阿賀野川など他の河川の津波到達点はまだ明確になっていない。

津波による新発田藩領の水死者数は、松ヶ崎浜村3人、河渡村1人、網代浜村1人であった²⁾が、新発田藩領以外の越後の死者数については深く追究されていない。

本稿では、いまだ確定されていない越後における1833年庄内沖地震の阿賀野川の津波到達点と荒川河口の水死者数を、鶴岡市郷土資料館所蔵『大泉昆録』所収の文書を検討するなかで明らかにする。

2. 庄内沖地震における阿賀野川の津波到達点

2では、1833年庄内沖地震による阿賀野川の津波到達点を、文書によって明らかにする。鶴岡市郷土資料館所蔵『大泉昆録』所収の文書で、西海三郎右衛門の倅三郎次が上京する道中、途中の越後で地震と津波にあった様子を庄内沖地震が起こった10月26日の翌日の27日に認めた文書（文書1）がある。

文書1の差出人西海三郎次の父は西海三郎右衛門である。西海三郎右衛門家は鶴岡藩城下町一日市町（鶴岡市）で御米宿をつとめる町人であった。西海三郎右衛門と同家と推定される西海三郎兵衛は、文政12年（1829）の庄内長者番付「鶴亀宝来見立」に行事としてその名がみえる。

文書1には、ただいま対馬屋と申す所へ津浪が打ち込こみ、親は子を捨て、子は親を捨て、逃げ去り候て、助けてくれという女あり、とある。西海三郎次一行は、10月26日七ツ時に築地宿（新潟県胎内市）を立ち、阿賀野川の渡し場のある松ヶ崎から寺山・上木戸・下木戸を通り沼垂（新潟市中央区）に至っている。この時、対馬屋（新潟市東区津島屋）へ津浪が打ち込こみ、親は子を捨て、子は親を捨て、逃げ去って、女性が助けてくれと言っていたという話を記している。

この文書1は地震のあった次の日に記されていて、対馬屋と距離の近い松ヶ崎・寺山・上木戸・下木戸・沼垂を通った西海三郎次が得た情報なので、津波が阿賀野川を遡上して海から2・5キロメートル内陸の対馬屋まで到達したことは間違いないであろう。

3. 荒川河口桃崎湊の水死者数

新発田藩の史料によると、庄内沖地震における越後の最大の死者数は松ヶ崎浜村の3人である。しかし、越後における最大の水死者は荒川河口（新潟県村上市）の塩谷町と対岸の桃崎湊（新潟県胎内市）の渡し場の被害者である。この地点で20人を越える水死者があったという史料の存在は知られていたが、いまだ十分な検討は行われていない。

3では史料の性格が明確な文書を検討することにより、荒川河口の桃崎湊地域の津波による水死者数を明確にしたい。

鶴岡市郷土資料館所蔵『大泉昆録』所収の文書で、庄内沖地震が起こった翌月の11月12日に、富塚芳右衛門が池吉之助・池玄斎に宛て出した文書（文書2）がある。富塚芳右衛門は鶴岡藩加茂組大庄屋の一族であると思われる。名宛人の池玄斎は庄内藩の国学者池田玄斎で、池吉之助は玄斎の長男池田信である。

文書2は地震が起こった翌月の11月に書かれた。ここには船問屋の秋野善次郎が体験した津浪のことを富塚氏に語って聞かせた内容がつつられている。秋野善次郎は用事があって村上（新潟県村上市）から船に乗り荒川対岸の桃崎に渡ろうとしていたところ津波に遭遇した。南郡御役人上下3人・人足2人が流死し、そのほかに32人が水死したとある。文書2を記した本人・富塚芳右衛門の体験ではないものの、地震の際に荒川の渡し場にいた秋野善次郎による津波水死者情報であることから、この情報は重要である。文書2に記される荒川の渡し場の水死者数38人という被害者数は間違いのないものであると考えてよい。

4. おわりに

本稿で明らかにした点は、以下の2点である。

- ① 1833年庄内沖地震の津波は、阿賀野川を遡上して海から2.5キロメートル内陸の対馬屋（新潟市東区津島屋）まで到達した。
- ② 1833年庄内沖地震の荒川河口渡し場（新潟県村上市・胎内市）の津波による水死者数は38人であった。

[付記] 本稿は、矢田俊文「一八三三年庄内沖地震における越後の津波到達点と水死者数」『災害・復興と資料』4号、2014年を再編集したものである。詳しくは論文をご覧ください。